



# 町民文芸

## 只見短歌会

二月詠草

大塚栄一

指導

病院の検査いくつも受くる朝長靴重く履きて出でゆく

古川 英子

寒明けて季節移ろふ頃なるに日毎降る雪我を悩ます

馬場 八智

降る雪を吸ひ込みて咳き咳く音の吸はれゆくらし行く道静か

小倉キミ子

豆拾ふ子らもなくなり節分に老らを呼びて息子豆撒く

渡部ゆき子

ふる里を離れ住む友電話などで年ごと故郷の思ひ深むか

関谷登美子

唐突に孫を託され嬉しけれどどの子と添ひ寝せむと迷ひつ

目黒 富子

雪まつり吹雪の中で舞ひたれば扇子持つ手に力入りぬ

渡部ヨリ子

同居する友活けくれし百合の花冬の佛間に時ながく咲く

新国 洋子

(出詠順)

## 只見俳句会

三月例会

目黒十一

指導

法要の座敷に古き春火鉢  
開幕は居合道見せ雪まつり

一穂

鴨一羽流れをくだる春の川  
はだれ野や村の温泉にぎわえる

敦子

百段の磴露れり雪解風  
玄関に乳の香流るる春日和

吉児

銀河消して峽を彩る冬火花  
牡丹雪ささめき合つて道に消ゆ

さちを

ふるさとの春は名のみの吹雪かな  
無人駅送る人なし名残り雪

信

厄払い下帯姿の男衆  
大氷柱背伸びしている小学生

都

草を編む手の中光る弥生尽  
鳥インフル見送りなしに鳥帰る

洋子

書き止めるなれど忘却おぼる月  
朝霞林をぬけて春入日

味代子

それぞれの彩り秘めて冬木立  
残雪を撥ねて椿のきらめけり

弘子

春泥を踏んで七戸へ布令にけり  
聴講や声の遠のく春の昼

恒夫

掌に載るふくよかな陶雛  
如月や軒垂る音光りつつ

礼

春満月われを小さくより小さく  
こそばゆし春満月の内に居て

順子

峠越え見ゆる町並み雪間草  
北風に向かう娘や入籍日

修一